

# 14日間の待機短縮

## 「柔軟な対応検討」

首相、オミクロン株で

政府は、新型コロナウィルスの新変異株「オミクロン株」感染者の濃厚接触者の待機期間について、現在の十四日間から短縮する方向で検討を始めた。発症までの潜伏期間が三日程度と、従来株よりも短い可能性があるため。

岸田文雄首相は十三日、

待機期間短縮について「社会機能の維持が困難にならないよう工夫しなければいけない。必要に応じて柔軟な対応を検討したい」と東京都内で記者団に述べた。厚生労働省に助言する専門家組織は同日会合を開き、全国の感染状況について議論した。後藤茂之厚労相は会合の冒頭、「これまで経験したことのない速さで新規感染者数が増加している」と指摘し、医療体制強化の重要性を訴えた。

国立感染症研究所によると、沖縄県内でオミクロン株感染が確認された人の潜伏期間は三日程度で、従来

株の五・一日などよりも短かった。

厚労省によると、新型コロナの濃厚接触者とは、感染が確認された人と近距離または長時間接觸し、感染の可能性が高くなっている人を指す。現在は十四日間、自宅などで待機が求められている。

同省は十三日、変異株PCR検査でオミクロン株感染の疑いがあった人は、一月九日までの一週間で、検査結果が出た人のうち84%に上ったとの断定結果をまとめた。二週間前は3%、二週間前は16%、前週は46%で、急速に広がる傾向が見て取れる。都道府県別では、東京が83%、大阪が88%、沖縄が85%といずれも80%台だった。

オミクロン株の感染者は全国各地で確認されており、専門家組織は「海外渡航歴がない感染経路不明例が継続して発生している地域もある」と分析している。